キスはレモンの味？

翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
キスはレモンの味？

【Ｎコード】
Ｎ０７３４Ｍ

【作者名】
翔

【あらすじ】

「……あんたいい加減に嫁に行きなさい」

吐き捨てるように母に言われた香澄。
全く乗り気じゃなかった見合いの会場に辿り付いた時に出会ったのは、絶世の美女で……？

「俺、女に興味ないんだよね」

「私だってあんたみたいな変人、好きになる訳ないわっ」

「……あっそ」

こんな2人のドタバタ恋愛劇？

この物語はフィクションです。
ちょっと重そうなテーマですが、作者が軽いので、そんなにヘビーな物語になる予定はございません。

性描写、あるのかなぁ？
R15くらい……で？

※こちらは運営サイトからの転載です

1話（前書き）

こちらもモバゲーから引っ越してきました。
更新はモバより早くしたい……なぁ。
あたしの頑張り次第か、それは（遠い目

1話

「あんた、そろそろ嫁に行きなさい」

リビングのソファーに仰向けになって、ポテトチップスを食べながらテレビを観ていた香澄は、ぐさぐさと刺さるような母の剣呑な声に顔を上げた。

時は日曜日の昼間。某国民的お茶の間番組の総集編を、ぼーっ眺めていたときのことだった。誰もが一度は目にするだろうこの番組を観ながら、予定のない日曜日を過ごすのはここ数年の香澄の日課だ。

「……はい？」

「はい？、じゃなくって。

あんたはいつまでそうズルズル楽な人生を送るつもりなの？」

若干２０歳で彼女を産んだ母は、今年で４７歳になる。昔はスレンダーだったのだが、今はその栄光は見る陰もなくなったただのオバサンだ。しかし、彼女が小学生のときの授業参観などでは、クラスメイトに「香澄ちゃんのお母さんって若いよね！」と褒められる、彼女にとっては微かに自慢の母親だった。

当時は皺などなかっただろう目を眇めて、射抜くように娘を睨んでいる。

香澄はその瞳が、まるで獲物を狙うヘびのようにねちっこく感じられた。……まぁ、へびがねちっこいかどうかは、人間の香澄には判断などつかないのだが。

「お母さん。
いきなり、何を？」
「これ、見なさい」

母の剣幕に驚いた彼女は、身体を起して彼女と向き合う。
『人と話すときはきちんとその人の顔を見て』
それが数少ない彼女の家のルールであり、幼い頃より口を酸っぱくして言われてるので、自然と身についていた。社会に出てから、この教えが有難かったなと思ったのは、まだ両親には伝えていない。

手渡されたのは、俗に言うお見合い写真だった。中身も見ないで裏を見ると、撮影された写真館のマークが入っている。
その名前を声に出さず読んで、香澄は納得したように呟いた。

「あぁ、ここ。
腕がいいって評判の写真館じゃない」

何回か前は通ったことがあるが、敷居が高そうで入ったことはない。それでもいつか、幸せな写真を撮りに行ってみたいと高校生の頃は願っていたりもしたものだ。
暢気な娘の科白に母は声を荒げた。
近頃すぐに怒るのは更年期のせいなんじゃないか、と思いながらもおっかなくてそれを母に伝えることが出来ずにいる。

「誰がそんなとこに注目しろって言ったの！
中を開きなさい！中を！！」

お見合い写真を渡されたのだ。母の怒りももっともな話であろう。
はぁい、と口の中でもごもごと煮え切らない返事をしながら、彼女はしぶしぶ写真を開いた。

世間体を誰よりも気にする、ある意味小心者の母だとはよぉく理解していたつもりだが。
それでもまさか、お見合い写真なんて持ってくるとは思わなかった。

「……なにρ（・д・＊）コレ」

中を開けてみてから、一瞬彼女は固まった。
それは……思わず顔文字になってしまうほどの写真だった。いや、『写真』すらそこにはなかったのだ。

明らかに写真が剥ぎ取られた形跡がそこにはあり、「断固見合い拒否」と油性ペンでデカデカと書かれている。ご丁寧に、かどうかは判断がつきかねたが、へたくそなアッカンベーをしたイラストまで付け加えてある。
これには香澄を始め、中身の惨状を知らなかったであろう彼女の母も、口を押さえて絶句した。

「……向こうは見合いするつもりなんてないみたいよ？」

見合い写真を閉じてから、してやったりの顔で香澄はゆっくりと母に視線をやった。
どこのどいつかは知らないが、これは余りにも常識というか、モラルが無さ過ぎる。仮にもお見合い相手に自分の顔を見せるつもりさえもないのだ。はっきりいってしまえば、ふざけている。
こんな写真を見せられれば、さすがヒステリックな母だって反対するに決まっている。

これでこの話は無かったことになるよね。いくらお母さんだって、こんなことは許せないって思うはずだし。

そう1人で完結して、これにて話は終わり、とばかりに彼女は再びソファーに寝転んだ。チップスに手を伸ばし、視線はサングラスを掛けた人気コメディアンに固定される。最近買ったばかりの、地デジ対応の液晶テレビはとても映りが良く、彼女のお気に入りのアイテムとなっている。既に部屋のブラウン管のテレビを観る気すらなくなってしまったくらいだ。

「……お見合いは来週の日曜日のお昼からよ。
あんたそれまでにそのぼさぼさの髪を何とかして来なさいよ」

その言葉に再び首を起し、仁王立ちになっている母の顔を見てから、怪訝そうに眉を潜めた。

「え？先方様は嫌がってるじゃない」
「先方様のご両親は嫌がってなんてないわ。
嫌だって主張してるのは、ご子息だけよ」

ぽかんとしてしまう。
既に分かっていたことなのだ。
相手が嫌だ、と言っていることは……。

「ちょっと、それって問題でしょ！！おかしいよ！！
結婚するのは親じゃなくって、私なのよ！？
何で本人たちの意思は無視な訳？」
「お黙りなさい！
決まったことなのよ」

母はそう叫ぶと、テーブルに置いていた携帯を片手に、肩を怒らせリビングを出る。

その後姿からでも、彼女が怒っていることは明白だった。きっと先方のご両親とやらに連絡を取るつもりなのだろう。

なのにどうして結婚を前提に話をされなければならないのか。

母の中では、香澄がその相手と結婚するのは当然のような口ぶりだった。

お見合いをしなさい、ではないのだ。

開口一番、確かに母は「嫁にいけ」とそう言ったのだ。

写真も満足に撮らない、誠意のないような人間の下に。

それはいくらなんでも

「……信じられない」

そこまでして母は自分をここから追い出したいのだろうか？

起しかけた身体を再びソファーに沈めながら、香澄は天井に向かって嘆息した。テレビの音量を少し下げると、廊下に出た香澄の母の声が微かに漏れ聞こえるが、何を話しているのは分からないままだ。

しかし、彼女が落としたその空気が、床にめり込むように落ちた音は聞こえた気がする。

＊

一話（前書き）

こちらは幾夜―ヒーロー―視点。
幾夜の視点は漢数字で、香澄視点は数字でいこうと思います。

一話

「は？」

残業では終わりきらず、深夜に近い時間にまで持ち帰った仕事を部屋でかたずけているときに、突然寝巻き姿の母から告げられたのは恐ろしい内容だった。

「決まったことだから」

「いや、俺は全く初耳だし」

ノートパソコンをカタンと閉めて、幾夜は仕事用の眼鏡を外した。普段はコンタクトを常用しているのだが、家にいるときは裸眼が眼鏡を使っている。それに今日これ以上していたら、装着時間の限界を超えてしまいそうだった。

しかしながら、目が悪くなることを考慮して仕事用の眼鏡は少し度を強くしてしまったため、画面の小さな文字を追わなくてもいいときは、掛けたいものではなかった。ぼやけた視界で、彼は無断で部屋に入ってきた母を睨む。

「明日、先方様に渡す写真を撮りに行くから、きちんとした格好をするのよ」

「……だから聞いてないって。

お見合いって一体何だよ、いきなりだし、しかもさ来週とかもう時間がないじゃないか」

今日は週末の金曜日。明日はようやく休めるのである。だからこそ、幾夜は会社から仕事を持って帰ってきていたのだ。

反論しながら怒りに眉を寄せ、思いっきり顔をしかめる。
年を重ねたに関わらず、今も近所では美人と有名な実の母は、そのせいか実に自分本位である。
息子である幾夜がいくら不快は表情をしようと、全く気にならないらしいのだ。

「いい加減、……落ち着いて貰わないと困るのよ」
「っ、」

吐き捨てられるように放たれた言葉に息を呑む。

「……落ち着くも何も、俺はまだ２４なんだけど。
それに俺に家に居られるのが嫌なら、出て行くっていつも言ってるだろ？」
「ここから出て行ったら、あなた、あの人と同棲でもするつもりでしょう？
そんなの絶対許しませんからね！
汚らわしいっ！！」

女特有のヒステリーを前面に押し出して、噴出した黒い感情のまま彼女は叫ぶ。

……実の息子に対して汚らわしいか……。

もう言われ慣れている、そんな誹謗中傷は。しかし、慣れてはいても繊細な幾夜の心に傷が付かない訳でもなかった。幼い頃より誰よりも優しいと評判だった彼の心は、母が思うほど強くはない。
そんな傷を胸の奥底に隠し嘆息しながら、幾夜は椅子を少し引いて仁王立ちになった母を、冷めた瞳で見据えた。
感情的に走られると、途端に自分の気持ちが冷めてしまう。

いつからだろう、こんな風になってしまったのは。自分の主張を押し殺してしまうようになったのは。
それは遠い過去のようにも思えたし、ほんのここ数年のことのようにも思えた。
ヒートアップしていく彼女とは反対に、冷静になった頭の隅っこで彼は考える。

今度は一体祖母に何を吹き込まれたのか……。

彼女のことを壊してしまった彼にしてみれば――迷惑極まりない話ではあったが――父が不在の今に発作を起す訳にもいかない。

『こんなにも精神不安定な母にしてしまったのは俺の責任』
前々からその気があったとしても、こんなにも激しいものではなかった。その負の感情が彼には強く根付いていて、両親を蔑ろに出来ないどこまでも心優しい幾夜には、己の感情を強くぶつけることは出来なかったのだ。

だから、自分の心を押し殺しながら、彼は呟くように自分を産んでくれた母に問う。

「……こんなあんたが言うような、人として出来損ないに誰かの人生を預けてもいいの？」
「……」

幾夜の苦さを含んだ声音に、言いたいことだけを告げ背中手で扉を閉めようとする彼女は、口を噤んだまま応えない。

大仰に溜息をつき、頭を振りたくもなる。

自分の都合の悪いことになるとすぐこれだ。

社会に出る前に結婚を強要され、裕福なために外に働きに出ることを許されなかった母には、――致し方ないのだろうが――そういう箇所がある。

自分の非を認めず、殻に閉じこもる。

それ以上それを追及することを、拒んだままその話は完了を迎えてしまうのだ。

元々受け止める力がない。

その上、強制的にも社会に出て、その訓練を受けることが出来なかった。

パタンとしまった扉の音は、全てを拒絶する母親の心の音のように聞こえて、彼は天井の蛍光灯を睨んで、幾夜はずっと漏らさずに堪えていた灰色の吐息を吐いた。

＊

2話（前書き）

さて、香澄の視点です。

2話

ビルが立ち並ぶオフィス街。
会社の自社ビルのお陰でか、屋上は社員たちに解放されていた。
社長の趣味なのか、決して広くはないそこには、家庭菜園のような小さな畑があり、グリーンカーテンを意識してなのか最近植えられたゴーヤのために、巻きつくための紐が用意されていた。
季節はまだ初夏、で暑いとは言えなかったが、あまり利用する社員は多くない。
しかし、元来青空を眺めるのが好きな香澄にとっては、そこは憩いの場であった。

日陰を求め、コンクリートにレジャーシートを広げると、そこに親友の葉子と一緒に昼食を取るのが彼女に日課だった。

「全く！信じられないんだけどっ」

長い黒髪をかき上げながら、香澄は箸を片手に唾を飛ばす。
故意的に飛ばしていないことが分かりながらも、葉子は自分の持ってきたサンドイッチを庇うように身を引いた。

時は翌月曜日。
会社に出社した瞬間から、香澄の様子はいつもと違っていた。
いつもはのほほんとした空気を醸し出しているというのに、今日はどこか切羽詰った顔をしていたのだ。
昼休みにでもそれを問い詰めようと思っていた葉子だったが、その必要性が全くなかった。

どこか幼さが抜けない容姿の香澄と比べ、葉子は美人と評されるくらいに大人びている。
そして、性格もクールでドライな方だった。

「それはそれは、また突然よね。
でも香澄、人生、諦めも肝心よ？
あんた、この話が浮上してこなければ、結婚するつもりなんてなかったでしょう」

サンドイッチを持つ左手にはキラキラと光る石がついた指輪がはめられている。
彼女は来月結婚を控えていた。
ジューンブライド、というヤツだ。
短大時代からの付き合いで、高嶺の花と呼ばれた彼女を射止めたのは、周囲が「え……、何でこいつが？」と揃って首を傾げるくらいの垢抜けない男だった。
垢抜けないどころか、オタク気質なのだ。誰がどう見ても。
どう見ても外見は釣り合わない。
しかし、プライドの高かった葉子から結婚してほしいとプロポーズを迫ってしまうほど、彼女は未来の旦那様にぞっこんなのだ。
人生、何があるか分からない。
嬉しそうに彼氏を紹介する親友の、今までみたことがないくらいの幸せそうな顔を眺めながら、香澄はマジマジと世の中の不思議を見た思いがしたものだった。

「そういう葉子は人生を諦めていないじゃないっ」
「あ、バレた？
あたしはダーリン愛してるから」

のうのうと言ってのけた親友は、それでもその愛しさを隠すこと

なく、嬉しそうにはにかんだ。
どうやら思い出すだけで頬が緩むらしい。
その笑顔は、美少女好きと豪語する香澄が一瞬でノックアウトしてしまいそうなほど、美しいものだった。

葉子の未来の旦那様の容姿は確かに冴えない。
どう見ても人並み、か、外見に頓着しないその持ち物を比較してしまったら、月並み以下……である。
それでも。

（葉子は今が1番綺麗なんだよねぇ）

男をステータスのように扱っていたあの頃が嘘のようである。
どこか世の中を斜めに見ていたような、高飛車だった態度も、あっという間になりを潜めてしまい、すっかり丸く穏やかな女性に変貌してしまった。
恋の力、恐るべし。である。

「それで？」
「それでって？」

疑問符が付いた接続詞を、香澄は疑問符で訊き返した。

「あんたねぇ、テンネンなのはいつものことだからかまわないけど。今自分が何を泣きついてきたのか、まさか覚えてないの？」
「あぁ、忘れてなんていないよ。
でもさ、葉子に泣きついて叫んだら、すっきりしちゃった」

アーモンド形の目を細めて、葉子は肩を落とした。
香澄は二重の瞳を瞬かせ、そんな親友を見つめる。

「出たよ、1回叫ぶとすっきりする変な癖が……。
それで、結局どうするのよ」
「お見合い自体には行くよ？
この際、折角だからさ。この長い間伸ばした髪をばーっさり切ってしまおうかなぁ、なーんて考えてるんだ。
イメチェンてヤツ？
ボブくらいにしてさ、これから夏、だしね？
お見合い自体は受けるつもりもないんだけど、これもいい転機かなって思ってさ。
ドレスだってお母さんが買ってくれるらしいんだよ、着飾るのも久しぶりだし、ちょっと楽しそうだなって思ったりもしてるんだよね」

長い髪が好きだ、と言われて。
なかなか切ることができずにいた、執着の証。
香澄はお弁当を自分の膝の上において、空いた手で自分の毛先をひょいと摘んだ。
長期間伸ばされた、腰近くまであるロングヘアは、どんなに手入れを頑張ってもやっぱり痛んでしまっている。
葉子はそんな香澄を見て、優しく目を細めた。

（前に進むいい機会かもしれないわね）

そう心の中で呟きながら、口では違うことを言葉にする。

「案外イケメン君だったりして」
「イケメンかぁ……。
イケメンはもういいなぁ。
それより葉子みたいな美人さんがいいかも」

「あたしはあんたとは結婚しないわよ」
「分かってるって。冗談よ！」
ふふっと、香澄は眉を吊り上げた友人を見て、相好を崩す。
「案外ゲテモノもいいものよ？」
「経験者は語る？」
「うーん、でもあたしのダーリンは見た目より中身勝負だからね。世間一般的に格好が良くないのはよぉく分かってるけど、大事なのは心だってよーやく分かったから」
「――ご馳走様でした」
香澄の嫌味すらさらっと流し、尚且つ惚気た葉子に、敬服した彼女は素直に頭を下げた。
「ま、何かあったら相談に乗るから。日曜日、どんな感じだったかちゃんと話すのよ？」
「ん。ありがと」
葉子の言葉に香澄は微笑む。
少し幼い見た目同様、警戒心のないこの親友を、葉子はいつも少しだけ心配していた。
野生の勘、というか。
危険察知能力は高いのだが、どこか……というかかなり抜けていて、見てる側としてはハラハラしてしまう。
これで本人はしっかりしているつもりなのだから、余計に心配なのだ。
（変なことになりませんように……。

本人はこんな調子だけど、相手のご両親も本人が嫌がるのを承知で、こんなごり押しで見合いさせようとしてるなんて……。
昭和のご時世じゃないのに、何か不安だなぁ。
嫌な予感がする……）

そんなことを思いながら葉子は空を見上げた。
雲ひとつない五月晴れ、そんな綺麗な青空が、何故か彼女の心を煽るのだ。

そして、その心配が的中することを、彼女は来週まで知らないのである。

そんな面倒見が良い親友の隣で、感情を解き放って自由にになった香澄は、

「あ、このおひたし美味しいっ」

母のお弁当に舌鼓をうつのだった。

＊

二話（前書き）

幾夜視点。

二話

明るい写真館のフロントで。
受付に立った長身の青年に、幾夜は珈琲豆でもそのまま噛んだような苦い表情を覗かせていた。

「見合い？」
「そう」

カウンターを通して目の前に立つのは、幾夜の恋人のカメラマン。
彼は出勤する平日でもないのに、きちんとスーツを着て、珍しく『写真を撮る』という正規の理由で来店した幾夜を驚いたように見つめた。

「……俺の母さんから連絡があっただろ？
写真を撮る予約をしたいって内容の電話が」
「うん、あったあった。
あんだけオレを嫌悪してんのに、何でここに連絡を寄越すのか不思議でならなかったんだよな。
成る程……そういうことか」

漸く合点がいった彼は、苦笑いを浮かべた。笑うと目の淵に皺が寄り、若干実年齢より老けて見える。
そんな恋人の引きつった笑顔を見ながら、幾夜は項垂れるように俯き呟いた。
他に客のいない静かな写真館では、そんな蚊のなくような些細な言葉もしっかりと届く。

「……母さんの声なんて聴きたくもないだろうに、嫌な思いさせて悪かったな」
「いや、全然オレなら平気だけど。
そんな扱いなんて慣れてるしさ」

ひらひらと手を振って、彼は幾夜を励ますように明るい声を出した。
幾夜とは違い、彼は自分の性癖すらフルオープンで、人から白い目で見られるもの慣れていると常に豪語していた。
どんな苦言も笑い飛ばしてしまう辺り、本当に彼は気にも病んでいないのだろう。
そんな恋人とは正反対に、すぐに凹んでしまう自分の弱さを呪いながらも、その声に引き上げられるように幾夜は顔を上げる。

幾夜は思う。
この笑顔が何よりも必要だと感じるようになったのはいつからだろうか、と。
単なる同級生だったはずの現恋人が、彼の恋愛対象なのだと気がついたのは一体どのタイミングだったのか。
そう問われても幾夜にきちんとした答えは見つからない。
強いて言うならば、乙女でもないが、最初から何か特別なものを感じていたのかもしれない。
会った瞬間、雷にでも打たれたような衝撃が五体を貫いた感覚は、まだ思い出すことが出来た。

「で、本当に写真撮るんだ？」

カウンターに片肘を付いて、彼の恋人達人はにやにやと笑っていた。

「一応そのつもりでこの格好はしてきた。
母さんの手前、ってのもあるんだけどさ」
「相変わらず真面目だな」
「相変わらずって、普通だと思うけどな。
強いて言うなら誠実、と言ってくれないかな」

幾夜が窮屈そうにネクタイを緩めるのを眺めながら、達人は肩をすくめて見せた。
確かに、幾夜は超が付くほどの真面目な人間である。
妙なところが人とずれているくせに、その枠内に嵌ろうとする、不器用でもある人間であった。
その道を外させた張本人である達人は、彼とは正反対の快楽主義者だ。
楽しければそれでいい、と刹那的な行動を楽しむ帰来があり、その正反対さが彼らが一緒にいる理由だと感じていた。

「すっげー格好良く撮ってやるよ。
その成立しないお見合いの為に、な？」

どこかその言葉に矛盾を感じる。
含みを持たせた言葉に幾夜は眉を寄せた。

「それってどういう……」
「ま、こっちに来いよ。
作戦も練ろうぜ？」

白いＹシャツに形ばかりのネクタイを締めた達人は、接客には相応しくない長めの明るい髪を邪魔そうにかき上げ、奥に入るように幾夜を促した。

*

二話（後書き）

今回の更新は短めです。

3話（前書き）

香澄視点。

3話

数年振りに、ばっさりと髪を切った。
今まで一体何にこんなに固執していたのだろう。
シャキシャキと軽快に鋏を躍らせる、美容師さんの鮮やかな手つきを見ながら、香澄は軽くなっている頭と確かに軽減されていくような心の痛みを傍観するように眺めていた。

（髪を伸ばしたままにしてたって、彼が迎えに来てくれるわけじゃないのに……）

まだ僅かに残っている未練が、その悪魔のような顔を心の中に覗かせたが、すぐに目を閉じて闇に呑まれないように心を封じ込んだ。
それは大きな失恋を経験したことがなかった香澄が、何年か前に手に入れた自分を怖さない方法だった。
あのときは、何もする気が起きず。
いっそのこと死んでしまえたら楽になると本気で思った。
そのことを知った彼は、少しでも自分を捨てたことを後悔してくれるだろうか。
そんな馬鹿なことが、幾度脳裏を過ぎったか、今では覚えてもいない。

「はい、完成！
香澄ちゃんが髪を短くするのなんて、何年振りかしら？
自分で言うのもなんだけど、いい感じに仕上がったと思うわー」

当時のマイナス思考を振り払ったのは、馴染みの美容師さんの綺麗な笑顔だった。

自分の完成作品によほど満足しているのだろう、その顔には本当に嬉しそうな笑みが浮かんでいる。

鏡の中の自分をようやく正面から見ることが出来た。
初夏らしく軽くなった毛先は、ワックスで軽く遊ばせていて、数年重かった髪にはない明るさが加わっている。
何だか新鮮なその姿に、鏡の中の自分は小さく笑った。

「……ありがとう」
「あら？気に入らなかった？」
「ううん、とっても素敵」

香澄はふるふると小さく首を振る。

「なら、もっと可愛い顔して喜びなさいよ」
「痛いってば、元さん！
顔をひっぱらないでっ」

元さん、と呼ばれた彼は香澄の顔から手を離し、頬を膨らます。

「ゲン、て呼ばないでよ、香澄ちゃん」
「じゃあ、なんて呼べばいいの？
ゲンさんは元さんでしょ？
他の名前でなんて呼べないよ。それとも美容師さんとか先生って呼んだら満足？」
「可愛くないこねぇ」

どこからどうみても男性の元は、れっきとしたオカマさんである。
が、可愛い奥さんを持つ愛妻家でもあった。
彼が不満そうに腕を組んで、頬を少し膨らます。

「可愛さは数年前に海に捨ててきましたから」
「あぁ、あの時は大変だったわねぇ」

海に捨てた、という言葉で彼は口内に溜めた酸素を外に押し出した。
ふぅ、という溜息を聞きながら、香澄は鏡を見ている元に頭を下げる。

「……あの節は本当にお世話になりました。
元さんにはいくらお礼を言っても言い切れないわ」
「やめてよ、そんな大したことなんてしないんだから。
これ以上そんな重い話はなしよ、って持ち出したのはあたしね」

ごめんなさい、と素直に謝る彼に、今日二度目の首を振ってみせる。

「気にしないで、元さん！
それに、私お見合いすることに決まったのよ。
後ろ向きばっかりじゃいられないもの、前に進まないと、でしょ？」
「そうね、そのお見合い相手、あたしみたいないい男かもしれないし」

その言葉に香澄は苦笑する。
確かに、その言葉の通り、元は格好が良かった。
そのおねぇ言葉とオカマ気質がなければ、さぞもてたことだろう。
しかし、彼の奥様はそんなオカマ気質のところが大好きなのだ。
あばたも笑窪、と香澄は思っているが、真正直に口に出したことはない。

さまざまな愛情がある。
パートナーの悪癖ですら可愛く思える、そんな強く純粋な愛情が、この世の中には、葉子のほかにもこんな身近に存在するのだ。

自分はそんな人に出会えるのだろうか。
そんな風に思えるように、再びなるのだろうか。

香澄は自分の妻について語りだす、数年来の付き合いの元を見ながら、小さく思案するのだった。

＊

三話（前書き）

幾夜視点。

三話

初夏を目前にして、店内は明るい色で埋め尽くされている。
軽い色が連なる布の山の中に、彼はいた。
ここはサイズが豊富に揃っていて、Ｓサイズから形によればＬＬサイズまで陳列されている、幾夜にとってみれな願ったり叶ったりの店だった。
しかも全体的に彼のセンスとマッチしていて、ここから買って外れたものは少ない。

「あら、お久しぶりね」

匂いたつように美しい女性、と彼女を見た誰しも形容するだろう。
まるで、可憐に咲き誇る白い花を連想するような、美麗なオーナーが、並ぶ服を眺めていた幾夜に声を掛けてきた。
幾夜はその声に振り向いて、柔らかな笑みをその口元に湛えた。

「ゆかりさん、お久しぶりです。
いつ日本に帰って来たんですか？」
「んー、一昨日かな。
弟の奥さんの為に作った服が沢山溜まったから、送るのもなんだし……と思って持ってきたの。
どうせなら喜んだ顔が見たくてね」
「ゆかりさんに弟さんなんていたんですか？
結婚されてるっておいくつなんですか？」

軽い世間話程度に、彼は昔から世話になっている彼女に訊いた。
ゆかりの表情からは、その弟の嫁、という女性のことをとても気

に入ってるのだ、ということがよく分かる。
小姑と嫁の関係は、類を見ないほど良好のようだった。
不仲な嫁と姑の姿しか目にしてきたとこがない幾夜は、その自分とあまり身長が変わらない女主人を不思議なものを見るように眺めていた。
自分の慈しんだ息子を取る嫁を悪呼ばわりする姑の姿と、ゆかりはとても重なる要素はないのだが、そう思ってしまうのは己が浅はかなせいなのか。
彼が理想とする女性像、西園寺ゆかりは可愛らしくも美しく微笑む。
彼女は少なくとも幾夜よりは年上だったが、そんなに離れてもいないはずだった。
だとすると、俺と同い年くらいか。
勝手に同年代を想像していた彼に飛び込んできたのは、とんでもない言葉だった。

「高校３年生」
「……え？」
「先月１８になって、早々に籍をいれたのよ」

早い、早すぎる。
無意識のうちに眉を潜めた幾夜は、失礼と思いながら立ち入ったことを訊いてみた。

「……子供でも出来たんですか？」

高校卒業を待たずして結婚するなんて、想像力の乏しい彼にはそれくらいしか思いつかない。

「ううん、違う違う」

ゆかりは顔の前で、ひらひらと綺麗に手入れをされた手を振る。
「じゃあ、奥さんが結構年上とか？」
「月華ちゃんはまだ１７歳よ。弟と同い年ね」
……出来てもいないのに、そんなに早く籍をいれたのか。
２人の馴れ初めなど微塵も知らない幾夜は、首をかしげながらも納得するように努力した。
「そ、そうなんですか」
「うん、折角だから特別に幾ちゃんには月華ちゃんを見せてあげるー。
出来損ないの憎たらしい弟だけど、こんなに可愛い奥さんを貰ったことだけは、本当に褒めてやりたいと思ってるのよね」
よっぽど可愛い義理の妹を見せびらかしたいのだろう。
彼女は上着のポケットからパスケースのようなものを取り出し、彼の前に開いて見せた。
そこには、可愛らしいとしか言い表せない美少女が、それはそれは可憐な妖精のようなドレスを着て微笑んでいる。
女性には興味が全くないはずの幾夜も、思わず食い入るように魅入ってしまった。
「可愛いでしょー？去年の学園祭のときの写真なのよー。
これで性格も良くってねー、不器用で泣き虫でどじでお馬鹿で、なのに喧嘩は強くって、本当に一途で健気なのよー」
……。
決して褒め言葉でない単語もいくつか入っていたが、義姉がそれ

がいいと言うのだから、何も他人の幾夜が文句を付けれるはずもない。
あまりの溺愛ぶりに引き攣った笑顔をゆかりに向けると、自動ドアが開いて、話題の人物が入ってきた。

「おねーさぁん」

鈴を転がしたような声に、2人が振り向くとそこには制服に身を包んだ幼妻が立っていた。

「月華ちゃん！いらっしゃぁい」

ハートをいくつも並べたような猫なで声に、幾夜は苦笑した。
パタパタと足音を立て、彼女は広めの店内の奥にいた2人の方へ走り寄る。

「こんにちは、お姉さん！
と、あ、ごめんさない！お客様でした？」
「そう、常連さんの幾夜君よ。
幾ちゃん、彼女が義妹の月華ちゃん」
「常連さん？」

月華は大きな瞳を瞬かせてから、ゆかりから視線を幾夜にずらした。
月華が疑問に思うのも無理はないだろう。
ここは女性専門のセレクトショップだ。

「初めまして、四聖、じゃないや宿世月華です」

しかし、深く疑問には思わなかったのだろう。

月華はぺこりと頭を下げ、にっこりと微笑んだ。
恥じ入る趣味だとは思ってないが、あまりに悪意も偏見もない反応に、彼は少しだけ面食らってしまった。

「……初めまして、竜崎幾夜です」
「これで自己紹介は終わりね。
月華ちゃん、あの馬鹿は？」
「今車を置いて来ますよ。
免許取ったばかりだから、乗りたくて仕方ないみたいで、今日も虎狼の運転で来たんです」

馬鹿の名前は虎狼と言うらしい。
つまりはゆかりの弟だろう。

「宿世虎狼？」

月華の苗字と耳にした名前を合わせると、見知った名前になる。
数年前に出会った、見目麗しい青年に。
しかし、彼は当時１８だったはずだ。と思い直す。
だとしたら今年２０歳になる年齢だろう。
同姓同名の別人か、と１人で呟くと

「誰が馬鹿だ、誰が」
「あんたが、に決まってるでしょ。虎狼」

聞いた覚えがある懐かしい声がした。
つっけんどんな言い方をしたゆかりの視線の先を辿ると、そこには数年前に見た整った顔がある。
長身の彼は、記憶の中の少年よりも少しだけ男臭くなっていた。

「あれ、もしかして竜崎さんですか？」
「やっぱり、虎狼君！」
「お久しぶりですね、お元気でしたか？」

男のくせに綺麗に笑う笑顔も当時のままだ。
目尻が下がり、口角が上がるのは人間誰しも一緒だろうに、どうしてこうも計算染みた笑顔が出来るのか。
それが自然の笑顔なのだから、また悔しいと同じ男として幾夜は感じた。

「姉ちゃんの店のお客さんだったんですね」

虎狼は幾夜の趣味を知っている。
現に彼らが出会った場所は、そういう場所だったのだ。

「虎狼、知り合い？」
「うん、ちょっとね。
おいで、月華」

不思議そうに問う彼女に、虎狼は甘い笑顔と声で手招きする。
数年前には見ることの無かった先程以上の、その蕩けそうな笑顔に、幾夜の胸は勝手にときめいてしまった。
この顔は女殺しでもあるが、男殺しでもある。

自分の腕の中に愛妻を閉じ込めた彼は、妻を自分の口で再度紹介した。

「俺の奥さんの宿世月華です」
「もう挨拶したんだよ？」
「いいの、俺が紹介したかったんだから」

不思議そうにする天然な妻の頭を、子供にするように優しく撫でる。
その様子から溺愛してることが、彼にもわかった。
数年前に出会った、影を背負ったような瞳はもうどこにも見られない。

「竜崎さん、今日はどんな服を買いに？」

いつものゆかりの言葉を、虎狼が訊くと

「……見合い用の勝負服を」

応えた幾夜の科白に、３人が三様に首を傾けた。

＊

三話（後書き）

虎狼と幾夜の話は、エブリスタの幼い約束番外編より。
あんまり深い関わり方はしてないですが、そのうちムーンに掲載します。
あ、ふたりの絡みはないですよ↑

虎狼と月華の馴れ初めは、手をつないでからどうぞw
番宣でした。

4話（前書き）

再び香澄視点。

4話

「え？
ご子息がいなくなった？」

綺麗なティーラウンジで母が受け取った電話から漏れた音は、これまた信じられない言葉だった。
両親と約束の時間まで暇を潰していた彼女は、流石に唖然とする。

楽しみにしていたわけではない。
今日を迎える直前まで、気持ちは鬱々としていたのだが、そんな気持ちは久しぶりに整えた髪形と綺麗なドレスを前に吹き飛んでしまっていた。
生来、単純に出来ているのだ。
多少の嫌なことなど、目先の小さな楽しさに吹き飛んでしまう、便利な性格をしていた。
どんなことがあっても、些細な楽しみを見つけて、その環境を堪能する特技が香澄にはあったのだ。

……が、常識では信じられないこと第二弾に、怪訝そうに眉をしかめる。

「……流石にこの縁談は諦めた方がいいんじゃないか？
香澄を馬鹿にするにもほどってものがあるだろう」

香澄の隣に座っていた父、和馬が、正面で顔面蒼白になっている母、香織を睨む。
和馬自身、妻が持ってきたこのお見合い自体を良しと思っていな

かった。
いくつになっても娘は娘、こんな形で嫁に出すのは、やはり抵抗があるのだ。
「そ、そうは言ったって、先方がどうしてもって言ったから」
「……そうやって常識もないことばっかりをしてるのは、先方の大事なご子息じゃないか。
そんなに見合いをしたくないなら、どうして話を受けたりするんだ。
それにしたって写真の件といい、無礼にもほどがあるだろう」
「それは先方の写真を撮った写真館の方の嫌がらせだって……」
嫌がらせとは穏やかではない。
ヒートアップしていく両親の喧嘩を他人事として捕らえながら、香澄はオレンジジュースに刺さったストローを銜え、自分の名前ほどに晴れ渡った空を大きなガラスから見上げた。
綺麗な空だなぁ。
こんな不毛な喧嘩を聞いてるなんて勿体ないくらい。
突き抜けるような青空には、園児が描くような白い雲が浮かんでいる。
その景色はこんな状況下にあっても全くその貌を変えることなく、自分の周りで繰り広げられていることが、とてもちっぽけに思えた。
「ね、こんなとこで喧嘩しないでさ、相手がこないなら帰ろうよ。
あ、でもさ。
こんなホテル滅多にこれないから、少しだけ見て帰るから、お父さんたちは先に戻っていいよ」
「……香澄、お前は悔しくないのか？

向こうはその両親さえも謝りにこないで、母さんに電話だけしてくるなんて！！
馬鹿にされたも同然なんだぞ！」
「……馬鹿にするも何もさ、わたしは自分のお見合い写真も撮った覚えがないんだよ？
お母さんがどんな約束を先方様としたのかはわかんないし、お見合いのルールってのも想像も付かないんだけどさ、向こうからしたらこっちも失礼にあたるんじゃないの？」
「写真も満足に撮ってないって……そうなのか？！」

父は視線を母に送る。
和馬はそんなことも知らなかったのだ、と。
香澄は目を見開いた彼の表情で気が付いた。
全ては母が1人、勝手に推し進めた話だったのだ。
少なくとも、父はこの話に何も関与していない様子だ。

外聞を気にする母はともかくとして、父には疎まれていなかったことに香澄は心の中で安堵の嘆息を漏らす。

「兎に角、わたしは1人で帰るから、ね？
気にしないでよ、出戻りみたいになったわたしが悪いんだし。
母さんを責めないで、気にしてはいないから。
久しぶりに綺麗な服を着られて、ラッキーくらいに思ってるんだから。
髪だってきっかけがなくて切れなかっただけで、こんな機会があって良かったんだよ」
「……香澄」

自分の味方になってくれた父に、娘は安心させるように笑顔を見

せた。

「へぇ、ここはレストラン階かぁ。
あ、この和食のお店で今日は食事をする予定だったんだよね。
高級懐石料理……食べたかったなぁ」

エレベーターに乗り込み、宿泊施設がない階へと案内を見て彼女はそこに降り立った。

いかにも高級ですと言いたげな、ぴかぴかに磨き上げられた床を歩きながら、昼食時のせいか人通りが多いフロアを、まるでおのぼりさんのような調子で歩く。

そんな中で見掛けたのは、本日のお見合い会場になるはずだった、和食のお店。

格式高そうなその作りを、香澄はぼんやりと眺めた。

ぐぅぅ……とお腹がなる。

「高級懐石を返せっ」

ぐっと珍しく綺麗に彩られた爪をたてて、拳を握り締める。
わなわなと震えたそれを、ぶつける相手が目の前にいるわけも無く。
彼女の声は小さな喧騒に掻き消されるのだと思っていたのだ。

ドンッ

俯いて入り口に立っていたせいだろう。

急いで店から出てきた誰かとぶつかり、空腹の怒りに震えていた香澄は小さな悲鳴を漏らしながらその場に倒れこんでしまう。

いや、倒れるというと語弊があるだろう。

正鵠をつくならば、飛ばされたという方があっている。

しかも毎日履いているヒールは低いものだったのだが、今日はいつもより高くて細いピンヒールに近いもの。

グキィ

泣き面に蜂とはこのことか。

……その上鈍い音が耳に入った気がする。

彼女は聞いてはいけない音を聞いてしまったことに気が付いた。

高校のときにやっていた部活のせいで、捻挫は癖になっている。

だからこそヒールはあまり履きたくないのに、今日の格好でぺったんこの靴を履くわけにもいかないと、無理やり履いてきたのだ。

「すみません！

大丈夫ですか？」

謝罪の声が耳に届いた。

――大丈夫な訳ないでしょうっ！！

叫ぼうと思ってあげた顔は、無様に固まる。

なぜなら、そこにいたのは彼女が好みと豪語する……美女だったからである。

「た、立てますか？」

困った顔をしても美人は美人だ。

勝手に傾国の美女と、目の前の女性に名前をつけた、実は歴史オタクな香澄は、心配そうに問う女性に言葉も無く見惚れていた。

動かない香澄を見て、どこかを痛めたと判断したのだろう。

香澄が動かなかった理由は全く検討違いなものだったのだが、足を挫いてしまったことは紛れも無い事実だったのだ。

無意識のうちに、足首をさすっていた香澄の所作に、美女は逸早く気が付いたようだった。

「お……いや、わたしこのホテルに部屋を取ってあるんです！そこで救急箱でも借りて応急処置だけでもしましょう？わたし、これでも運動部のマネージャーだったことがあるので、応急処置にはなれてるんです！」

具体的なことを言われて、香澄はようやく我に返った。

意識を現実に引き戻すと、確かに足は痛いが、ぼーっとしていた自分にも非はあるのだ。

そこまで迷惑を掛ける訳にもいかないとその厚意を辞退しようとした。

「えっ、いや大丈夫で……」

「大丈夫じゃないでしょう？

1人で立てないと思いますし、捻挫は早めの処置が大事なんですよ」

そういうと、どこにそんな力があるのか。
美女は香澄を持ち上げた。
所謂お姫様抱っこ……。

お姫様みたいな女性に、いかにも平凡な香澄が抱っこされる姿は、傍から見ても酷く滑稽な姿だったのだが、美女はそんなことには頓着がないようだった。

「とにかく、つかまっていてくださいね」
「は、はい」

あまりの剣幕に頷くことしか出来ず、持ち上げられた彼女は美女の首に手を回した。

本当に部屋を用意していたらしい。
高級ホテルは、1人の部屋まで調度品が品良く揃えられ、香澄の知る安いホテルの一室とは違うその設えに、感心して辺りを見渡してしまった。

「そこのベッドに座って待ってて。
今フロントから救急箱を借りるから」

美女にそう言われ、部屋を出て行く美女を見送って、素直に彼女

は上質なベッドの上に腰を下ろして待つことにした。
しばらくするとチャイムが鳴る。
返事と共に、美女がドアを開くと、そこには救急箱を手にしたホテルマンが立っており、少しだけ言葉を交わし、部屋から出て行くのが、僅かに開いていたドアの隙間からうかがい知れた。

「救急箱借りたから、手当てしましょう」

白い箱を手に持った女性が、香澄の足元で膝をついた。

「すみません……わたしがぼーっとしてたばっかりに」
「本当よね！」
「……え」

まさかの不貞腐れた声に香澄は目を瞬かせた。
しかし、高飛車な女性がよくするように、少しだけ顎を上げた彼女は、すぐに相好を崩す。
その笑顔が魅力的で、香澄はまた見惚れてしまった。

「……って言いたいとこだけど、前を見ない私がいけなかったのよ。急いでたからって言い訳にはならないわよね。
ごめんなさいね」

患部を冷たいタオルで冷やしながら、美女は申し訳なさそうに眉を八の字にして、頭を下げた。
ふわりと柑橘系の香水が香り、それだけで何だか香澄は夢心地になってしまう。

美女は手馴れた様子で、香澄の足にテーピングを施す。
その手際のよさに、香澄はぼーっと見とれていた。

「軽い捻挫だと思うから、これで大丈夫なはずよ。
明日もし腫れてしまったら、病院に行ってね……。って自分じゃテーピングなんて出来ないわよね。
処置が早い方がいいと思ってこんなことをしちゃったけど、医者に行ったら医療費をちゃんと請求してね」
「あ、大丈夫です。
捻挫には慣れてますから。
こんなに上手には出来ないけど、多少はまだ覚えてると思います」
心配そうに柳眉を寄せて、本当にごめんなさいと再度謝罪する美女に、香澄はぶんぶんと首を降る。

「そんなに気にしないでください」
「……でも、ホテルの宿泊者ではないんでしょ？
お食事かなにかだったんじゃないの？」

図星をさされ、香澄は閉口する。
確かに食事の約束はしていたのだ、もう流れてはしまっていたが。

「はい、すっぽかされちゃって」

香澄は小さく肩を竦めて舌を出す。
それを彼氏にドタキャンされたと勘違いしたのだろう。
美女は香澄の短くなった髪を優しく撫でて、慰めるように微笑んだ。

「そう、元気出してね。
男なんて山ほどいるもの、その人だけじゃないわ！」

元気づけようとしてくれている彼女の気使いが嬉しくて、誤解だと言い出せない香澄は、彼女の誤解をそのままにしておくことにした。

「あの、お詫びをしてくださいってお願いするのも、何だか申し訳ないんですけど……」

毛足の長い絨毯が敷いてある床にしゃがみ込み、テーピングの道具を綺麗に仕舞っている美女に、おずおずと香澄は話しかける。

几帳面らしい彼女は、きちんと救急箱の中を整理して、もとあった場所に治療に使った道具を片付けている。

その丁寧な女性らしさに静かに感動しながら、視線だけを寄越した彼女に香澄は言葉を続けた。

「今日は……お暇ですか？」

「え？」

「あの、予定をすっぽかされたって話はしましたよね？」

女性から解放された足を、所在なさげにぶらぶらとさせながら、自分でも言葉足らずだと感じながら、声を重ねる。

「えぇ、今そう聞いたばかりだわ」

「あの、もし、お姉さんがこれからお暇なら、で結構なんですけど……。

少し私にお時間を割いてくれませんか？」

そこまで香澄が告げると、彼女はパタンと白い四角の箱を閉じた。

それから、ふむ、と口元に手を当てながら、天井を仰ぐようにしてしばし静止する。

……厚かましいお願いだったかなぁ？

もう少しこの綺麗な女性と一緒の時間を過ごしたい。

ドキドキしながら、香澄は考え込んだ仕草をする彼女の返答を待ったのだった。

＊

四話（前書き）

遅くなりました！
幾夜視点です。

今日、モバの方をようやく書き上げたので、アップ致します。

四話

お見合い当日。
澄み渡るような青空のもと、その予定は決行される。
仕事が終わらない上、当日遅刻をするといけないから。
そんな理由を付けて、両親と見合いの席に行くことをしなかった幾夜は、個人的にホテルに部屋を取っていた。
何時にどこで。
耳にたこが出来るほど聞かされたから、もう間違えることはない。
仕事人間と言って過言ではない父である渉は、少し大きな荷物を持ちながらも出かける幾夜に何も文句を言わなかった。
母も旦那の手前、幾夜に目立った反論はしなかった。

「こんなもんかなぁ」

ぽつり呟いて、幾夜は鏡の中の自分を食い入るように見つめる。
安いビジネスホテルではない上質な空間。
すべてのものがたまに利用するそれとは違っていた。
綺麗に磨かれた洗面所の鏡の中には、そんじょそこらのお嬢様でも太刀打ちできないような美女がいる。
切れ長の一重の瞳にアイプチを施せば、涼しげな二重になる。

元より母譲りの鼻筋は整っていて、綺麗な方だった。
平均より薄めの唇にも、少し厚めにラインを引いて、色を乗せグロスで彩れば。
思わず世の男性が食らいつきたくなるような、艶っぽい唇の完成だ。
慣れた手つきでウィッグを付け、整える。
高い金額を出しただけあって、鬘と言えど素人目には分からないだろう。
ほんのりとチークで彩りを加え、化粧を終わらせた幾夜は、ベッドの上に出しておいた細身のワンピースに身を包む。

それは、先日西園寺ゆかりの店で買い求めた、彼の「勝負服」だった。

再度。
鏡の前で自分の姿を映す。
そこにはさっき自分でもしっかりと認識したような、どこからどうみても女性の姿の幾夜が佇んでいた。

女性という性別に生まれたかった訳ではない。
女性として愛する人に愛されたかったのでもない。

確かに最初、この女装という行為を始めたきっかけは、今付き合っている男性に勧められたからだった。
元々カメラマンという職業を目指しており、実家が写真店を営む達人は、同世代の少年たちよりもずっと美を知っていた。

幾夜は男性としては小柄で華奢な方である。
身長も低い、とまでは言わないが。
長身の女性も多くなった昨今、特に彼女たちに肩を並べて、抜き

んでて長身とまでは言えなかった。
元来、内向的だった性格のため、外に出て遊ぶことも少なく、肌も白く、世の女性たちが羨むほどに肌理も細かい。
話す声音も穏やかで、少し低い声の女の声として、耳障りも良い。

（ここまで常習化するとは思わなかったな……）

薄い笑みを口元に張り付ければ、まるでつぼみが綻んだような妖艶さを彷彿とさせた。

あれは……。
恋人同士としての甘い行為を終え、ぐったりと息を乱す幾夜に。
その紅潮した頬と赤く腫れた唇、快楽で潤んだ瞳に何かを思った達人が半分興味本位で施した化粧は、加害者である彼を驚かせるような結果を生みだした。

「さて、と。
そろそろ時間かな……」

時計の針が指定された時間を几帳面にも指し示した。
両親との約束の時間をほんの少しだけ、過ぎてしまったようだ。
むき出しになってしまった肩に、先日出会った虎狼が選んだストールを掛けた。
葉桜の季節に相応しい若草色のストールは、彼の白い肌を綺麗に魅せた。

付け爪を付けた指で、前髪を再度セットし直し。
外に出ようとした瞬間、携帯の呼び出し音が鳴り響いた。
ディスプレイには母親の名前が表示されている。

「……もしもし」

神経質な母親が時間に遅れた幾夜を咎めるための連絡かと思い、低い声で彼は受話器に口を寄せる。
しかし、響いた声音は切羽詰まったような、そんな普通ではない声音だった。

『幾夜、今ホテルにいるの？』

「うん、今から部屋を出ようと思っていたけど」

『実家のお父さんが倒れたから、今から病院に行って来るわ！
悪いけど今日は行けないって先方様に伝えて貰えるかしら？！』

電話の向こうの母親の声は、切羽詰まっていて何の余裕も感じられない。

「え、祖父さん大丈夫なの？」

幾夜の脳裏には、母とは違う穏やかな性格の祖父の顔が浮かぶ。
外孫ではあるが、幾夜をよく可愛がってくれた、大好きな存在だった。安否が気にならない訳はない。

『……命に別状はないそうだけど、心配だからとにかく行って来るわ。
今日は戻らないと思うから、家のことを宜しく頼んだわよ』

家にいる祖母と二人きりになってしまうことがとても苦痛ではあったが、こんな時にそんなことは言ってられない。
素直に首肯した幾夜は、そのまま電話を切ったのだった。

「え？キャンセルの連絡が来てるんですか？」

お見合いの会場となった、有名な日本懐石料理の入り口で、ドレスに身を包んだ幾夜は目を見開いた。
料亭を意識したその店は、ホテルの中だというのに、人工的ではあるが日本庭園を臨むことが出来る造りになっている。
しかし、瞠目した彼の瞳は。
その景色を楽しむことはなかった。そんな余裕はないのだ。

女装をして話す時の声音は、いつもより少し高めに、柔らかく出すことを心掛けている。
どうやら自分を出迎えてくれた着物の女性も、幾夜の性別を疑ってはいないようだった。
彼女は、申し訳なさそうに幾夜に頭を下げる。
何も従業員に頭を下げさせることではない。
困惑しながらも、彼は女性に頭を上げるようにと促した。
先方に伝えてくれ、と母は言ったはずだ。
少なくとも幾夜は、お見合い相手に会って、今の自分を見せる為に部屋を取ってまで、こんな格好をしたのだ。
今さら話も出来ないのでは滑稽すぎる。

「分かりました、ありがとうございます。
こちらがきちんと確認しなかったのが悪かったのですから、気にしないでください」

丁寧に頭を下げ返し、後ろを向いた。
自動になっている上品な引き戸はその動作で微かな音を立て開き、そのまま前方を確認せずに店を出た。

ドンッ

そして響く小さな悲鳴。
何かにぶつかってしまった。

その衝撃に一瞬ぐらっとしたが、幾夜は小柄とはいえ性別は男性である。
そしてぶつかって弾き飛ばしてしまったのは、自分と同世代の若

い女性らしかった。

（うわ、俺何やってんだよ）

真っ青になりながら、弾き飛ばして転ばせてしまった女性に声を掛けた。

「た、立てますか？」

幾夜は慌てて突き飛ばしてしまった女性に手を差し伸べた。
大きいとは言えないが、丸い瞳を剥くようにして、食い入るように彼を凝視している。

（お、俺の顔に何かついてる？）

ボブに近い髪の女性は、言葉を発しはしなかったが。
無意識なのだろう、足首を労わるように摩っている。
初夏とは言え、床に直接薄着で座ったままでは身体も冷えてしまうだろう。
しかも、ここはレストラン街だ。
自分が部屋を借りている場所よりも、人通りはある。
現に通路の往来で向かい合わせになって、行き交う人の邪魔をしていることは紛れもない事実だった。

兎に角、何とかしなくては！

こんな為りをしているが、彼はフェミニストに近い人種だ。
自分の趣味や性癖もあり、好んで女性との距離を縮めることもしないのだが、女子供には際限なく優しくしてしまう傾向がある。
だから、自分の母に対してもあれだけ蔑まれておきながらも、本当の胸に抱える気持ちは言えないでいた。

「お……いや、わたしこのホテルに部屋を取ってあるんです！
そこで救急箱でも借りて応急処置だけでもしましょう？
わたし、これでも運動部のマネージャーだったことがあるので、応急処置にはなれてるんです！」

陸上部のマネージャーだったことは本当だ。
そして、軽い捻挫などの手当てには慣れている。
まだ出来る自負も。

幾夜が必死に申し出ると、彼女はハッと何かに気がついたように瞬きを繰り返した。
どうやらどこかにトリップしていたらしい。

「えっ、いや大丈夫で……」

「大丈夫じゃないでしょう？
1人で立てないと思いますし、捻挫は早めの処置が大事なんですよ」

辞退しようと首を左右に振る仕草が、どこか幼さを感じさせる。
自分より少し年下かもしれない。
そんな予測を立てながら、今の自分が他人にどう見られているのかも忘れ、幾夜は戸惑う女性を抱えた。
決して軽くは無い。
太くは無いが、腕に抱いた女性は失礼ながらも細いとはいえない、ごく普通の体型だ。

しかし、こんな姿の中にも僅かに残った男としての矜持を奮い起して、彼は自分の宿泊していた部屋へと足を進めた。

事情をホテルマンに説明し、従業員用であろう救急箱を貸して貰った。
タクシーで病院に……と促してくれた彼に、幾夜は頷こうと思ったが、今日が日曜日だと思い出して思い留まる。
どう考えても、救急外来まで行って診て貰う怪我でもない。
それに、交通事故などでの衝突でもない。
捻挫としか言いようのない怪我を大袈裟にしてしまったら、彼女が気に病むだろう。
そこまで考えを巡らして、気を使ってくれた従業員に丁寧に頭を下げると、彼は顔を赤くして立ち去った。

部屋に戻ると手持ち無沙汰そうに、彼女がベッドの上に座っている。
女性と2人きり、しかも場所はホテルの一室。
こんな状況は生まれて初めてだが、今の幾夜の性別は見掛けだけは女性である。
今、目の前で足を投げ出してこちらに目を向けた彼女も、自分の性別を疑ってはいないだろう。

（俺がヘマをしなければいいだけだ）

呪文のように自らに言い聞かせて、幾夜は彼女の元に足を進めた。

「救急箱借りたから、手当てしましょう」

座る彼女の前に膝を着く。
開いた救急箱の中には様々な薬が、整頓されて並んでいた。
幾夜は自分の会社の、使用期限が切れそうな薬が乱雑にいれてある薬箱を思い描き、薬を取るために俯いて隠れた口元で苦笑した。
さすがは一流ホテル。
こんなところにも、意識が行き届いているらしい。

ぽーっとしている女性の痛めた足を、そっとベッドの上に移動させる。
手当が迅速だったためか、元々重いものではなかったせいか。
痛めた足首に腫れる様子は見られない。

しばらく状況を確認していた幾夜は、これなら大丈夫か、と判断してテーピングで固定することに決めた。
どうやら本当に医者には行かなくても良さそうだ。

「軽い捻挫だと思うから、これで大丈夫なはずよ。
明日もし腫れてしまったら、病院に行ってね……。って自分じゃテーピングなんて出来ないわよね。
処置が早い方がいいと思ってこんなことをしちゃったけど、医者に行ったら医療費をちゃんと請求してね」

そうすると自分の連絡先と名前も教えなくてはならない。
今の姿である以上、自分の本当の名前を名乗ることに抵抗があるが、このまま放置するということも彼の性格上出来ないことだ。
ごめんなさいと謝りながらも、心の中ではどうしようかと少々思い悩み始める。

「あ、大丈夫です。
捻挫には慣れてますから。
こんなに上手には出来ないけど、多少はまだ覚えてると思います」

彼女は勢いよく左右に首を振った。

「そんなに気にしないでください」

そんなことを言われても。
幾夜が気にならないはずはない。
幾夜が先ほど演じた高飛車な女のような態度を取って貰った方が、幾分か気分は楽だったように感じた。
自分の方に非があると言うのに、こうも頭を低くされてしまうと反対に困惑してしまう。
彼女には幾夜を多少とはいえ詰る権利はあるのだ。

「……でも、ホテルの宿泊者ではないんでしょ？
お食事かなにかだったんじゃないの？」

そう、どう考えても彼女の格好はただの旅行に来た、というだけの軽装には見えない。
しっかりと化粧を施し、これからパーティにでも出掛けて行けそうな装いだ。
ここの宿泊者でもなければ、高級と呼ばれるホテルでの食事しか、想像力のない彼には考え付くことが不可能だった。

「すみません……わたしがぼーっとしてたばっかりに」

いかにも恐縮してます、といった表情で。足を所在さなげに揺らす女性は口を開いた。

（……あんまり患部を動かして欲しくないんだよなぁ。安静にしとかないと悪化する可能性があるから）

そう思いながら、幾夜は何故か反省をしている彼女に

「本当よね！」

不機嫌そうな顔を作りだして応えた。

「……え」

流石にその発言に驚いたのだろう。
ぴたりと揺れ動いていた足が止まる。
よし、止められた。
そのことに微かに安堵した彼は、咄嗟に演じた矜持の高そうな――彼の中の――女性像を、一瞬で崩し、柔らかな笑みを浮かべた。

「……って言いたいとこだけど、前を見ない私がいけなかったのよ。
急いでたからって言い訳にはならないわよね。
ごめんなさいね」

彼女が一方的に悪いのではない。
何せもう性別が違うのだ。勿論肉体的な作りも、筋肉量さえも異なるだろう。
身体の動きと共に止めてしまった彼女の、活発に活動していた顔

の筋肉だけは元に戻そうと、いつもより優しい声を意識して喉から出した。
洗面台から持ってきた濡れタオルで患部を冷やしながら、状態を確認する。

（特に激しい腫れも認められないなぁ……）

あまり痛がっていないことから、そんなに重い怪我だとは感じてはいなかった。
が。
彼女の捻挫が軽度だということを再認識して、心の中でほっと嘆息した。

痛いところを突いてしまったのだろう。
途端に彼女は唇をぎゅっと噛むように、内側にくわえ込んだ。

（うわ、地雷踏んじゃったか？）

やばっ、と幾夜が顔を歪めた瞬間

「はい、すっぽかされちゃって」

不穏な空気を吹き飛ばそうと、彼女が明るめの声を出してくれた。
肩をひょいと一度持ち上げ、数秒前まで噛んでいただろう口唇が

弧を描く。
しかし傷付いてはいるのだろう。
先ほどまで、幾夜に向けていたはずのキラキラした瞳の輝きが、いつの間にか消え失せてしまっていた。
幾夜の心には、満天の夜空に薄ら掛った雲のような、妙な罪悪感が浮上する。

「そう、元気出してね。
男なんて山ほどいるもの、その人だけじゃないわ！」

その明るい表情に影を差したくない。
そんな一心で、出会って間もない彼女の頭を優しく撫でていた。

「あの、お詫びをしてくださいってお願いするのも、何だか申し訳ないんですけど……」

ベッド脇にしゃがんだ幾夜が治療に使った道具を、元に戻していると。
遠慮がちな声が、頭上より降ってきた。

「今日は……お暇ですか？」

突然の質問に、幾夜はぱちくりと瞬きをした。

「え？」

「あの、予定をすっぽかされたって話はしましたよね？」

「えぇ、今そう聞いたばかりだわ」

「あの、もし、お姉さんがこれからお暇なら、で結構なんですけど……。

少し私にお時間を割いてくれませんか？」

時間を割く？

幾夜は考え込むときの、いつものポーズをとる。

本人はその無意識な癖に気がついてはいない。

のちにこれに気がついていたら何かが変わっていたかもしれない。

そう思って複雑な心境になることなど知る由もない彼は、彼女の提案に乗ってあげることにしたのだった。

＊

四話（後書き）

あれ？微妙な事情の相違が生まれてる？
大丈夫です、間違った訳ではありませんので。

遅くなりました（「ー」；　ヒヤリ

5話（前書き）

久々の更新です。
今回は香澄視点になります。

5話

「何が食べたいですか？」

足が痛いのも忘れ、すっかりご機嫌になった香澄は、テーブルを挟んで正面に座る彼女の顔を覗き込んだ。

……あれから。

香澄と違って、慎重な女性は。

香澄の患部が腫れてこないことを確認したかったような顔をしていたが。

怪我なんて何のその、勢いよく自己主張した空腹の音に、その綺麗な顔をしばし歪めてから、「食事に行きましょう」とようやく立ち上がったのである。

ホテルでは堅苦しくなりそうだったので、付近にあった可愛らしいカフェに足を向けた。

お見合い予定だった香澄もその女性も、高級ホテルにいたせいで綺麗な格好をしてはいたが、カフェに入ってもぎりぎり浮かない程度ではある。

「そうねぇ……」

メニューに視線を落とし、彼女は口元に手を当てる。

（あれ、この仕草さっきも見たな）

すっかり彼女の観察隊と化した香澄はそんなことを思った。
女性にしては少し角ばったような大き目の手、長めの指。
淡く彩られた爪もとても綺麗な形をしている。
香澄はふと、自分の丸っこい爪と見比べて、心の中で苦笑した。
美人は爪の先まで美しいらしい。自分とは偉い違いだ。

ガラス張りの店内には、心地よい日差しが差し込んでいる。
入店した時間が少しランチタイムから外れていたのに関わらず、店内は人で溢れていた。
流石は日曜日、と言ったところか。
その中、人ごみを掻き分けるようにして、ゲットしたその席は、道路に面した2人掛けのものだった。
自分の食べたいものが決まり、メニューから外に意識を向ければ、歩道を歩く人々がこちらを観ていることに気付く。

どうやら香澄の同伴者に魅せられているらしい。

「……じゃあ、このパスタとサラダセットで」

本日のおすすめ、と書かれた文字と写真を。
唇から手を離して、彼女の指が指し示す。

「はい、了解です。

じゃあ、オーダーしますね」

にっこり笑ってそれを受けた香澄は、軽く手を上げてウェイトレスを呼んだ。

２人分の注文を告ると、食後のデザートは何がいいのかと訊ねられた。

どうやら彼女が頼んだセットには、デザートが付くらしい。

「……生クリームは食べられる？」

選択出来るケーキを何故か真顔で眺めた女性は、その真剣な瞳を香澄に向けた。

「はい、大好きですけど？」

好きも何も、香澄の大好物である。

不思議なことを聞くなと思いつつ、素直に首肯すると「それじゃあ、このオススメショートケーキで」と言い、店員にメニューを渡した。

「お姉さん、お名前を聞いてもいいですか？」

料理が来るまで手持無沙汰になった香澄は、目の前の女性に聞い

た。

「……ゆかりです」

「ゆかり、さん！」

綺麗な人は名前まで華麗らしい。

少し低めの声で遠慮がちに名乗られたその名前を、香澄は心に刻みつける。

「あ、私は香澄です！」

「……香澄さん。

綺麗な名前ね」

ゆかりと名乗った彼女は、儚げにほほ笑んだ。

褒められたのは親が付けてくれた名前だけだと言うのに、香澄の頬は勝手に色付く。

見合いはすっぽかされ、怪我もしたというのに。

香澄の胸の中は、何故か春の陽射しの中にいるような、ほっこりとした温かさに満ちていた。

その理由は自分でも判らなかったが、何となく正面に優雅に腰掛ける女性のお陰だ、ということは理解できる。

（……なんていうか、雰囲気が凄い良いんだよね。
安心できるというか……）

香澄の持つ偏見かもしれないが、美人特有のツンとしたプライドの高い空気は微塵も感じない。
その場の雰囲気を、直感的に肌で感じてしまう、半ば動物的な本能を頼りに生きている彼女にとっては、そういう風に思えることはどんなことよりも特別なことなのだ。
運ばれてきたカフェオレに砂糖を三杯入れ、かちゃかちゃとかき混ぜていると。
刺さるような視線を手元に感じた。

「……な、何か？」

「そんなに砂糖を入れて……甘ったらくならない？」

言われた意味がすんなりと理解出来なかった。
ぱちくり、と何度も瞬きを繰り返し、驚いた脳内で質問をリフレインした。
反応の悪い香澄のテンポに不思議そうにしながらも、ゆかりは口を閉ざしたまま返答を待っているようだった。

「だ、大丈夫ですけど。
ゆかりさんは甘いの苦手なんですか？」

「……果実的な甘さは平気なんだけど、特に疲れてるときとかはたまに１００％のジュースを飲むときもあるわ。
それでも酸味がある柑橘系じゃないと飲めないの。
でも、甘味として砂糖をそんな風に入れたことはないかもしれない」

酷く真剣な面持ちでそう語る、女性としては珍しい言葉に、香澄は目をまん丸にした。
甘いものが苦手な女性なんて見たことが無い。
ゆかりにとって、珈琲に大量――とは香澄は思ってない――に砂糖を投入するとこが、酷く特殊なことに思えたのだろう。

（今まで、女友達とお茶に行ったこと無かったのかな？
それともゆかりさんの周りは皆大人の女性ばっかりなの？）

何も珈琲をブラックで飲むことだけが大人の条件でもないのだが。
それでも、ちょっとだけ天然なところがあるのかもしれない。
不思議そうに首を傾げるゆかりを、楽しそうに香澄は眺めたのだった。

「はい、これ」

食事が終わった後、運ばれてきたケーキをウェイトレスから受け取ると、ゆかりはそのままそれを香澄の目の前に置く。
淡いピンクのテーブルクロスに、真っ白な皿が映え、純白のよう

な生クリームが飾られたショートケーキ。
一瞬言われたことが分からなかった香澄は、皿を凝視してから数秒後に口を開いた。

「え、これって？」

「お店に入ったとき、ショーケースの中を目で追ってたでしょう？
食べたいなら頼めばいいのにって思っていたの」

「……」

ゆかりは頬を緩めながら言う。
確かに見ていた記憶がある。
それは『食べたい』という感情とはほど遠い、苦いような気持ちだったのだが。
見ていた、ことをゆかりは『本当は食べたい』と理解したらしかった。
香澄の過去など知らないゆかりにそこまで推察しろなどとは、土台無理な話である。

（生クリームは本当に大好きなんだけど、まさか『みかん』のショートケーキなんて……。
……今まで気が付かなかったけど、もしかしてここでなんてあの人ケーキなんて買わなかったよね……）

ケーキとは正反対の苦いような辛いような。

辛酸を舐めるような、そんな気持ちが身体の中心から込み上げてくるようだ。
ほんのさっきまでの楽しかった気持ちが、どんどんと奈落に落とされるように暗くなっていく。

「何のお詫びも出来ないから、せめてこれくらいはね？」

あんなに近くに感じていたゆかりの声が、耳鳴りを始めた奥から聞こえた。
綺麗に飾った手が、スイーツ用の小さなスプーンを、ケーキの置かれた皿に重なる。

カシャン、と鳴った僅かな音は、香澄を忘却したい記憶の元へと誘っていった。

＊

五話

ひょこひょこと歩く香澄の少し後ろを歩きながら、ハラハラと幾夜は彼女の足を気にしていた。
幾夜としては、ヒールなんて履かせたままにしておきたくなかったのに、靴屋に寄ろうと提案した彼に、香澄は首を縦に振らない。
ランチタイムが終わっちゃいますから！と首肯しようとしない彼女の瞳には、幾夜が彼女の為にお金を出すことが分かっていたのだろうが、変に恐縮されてもこちらが困るのだ。

（甘え下手、なんだろうな。
そんで変なとこ意固地だよな、こいつ）

嘆息を我慢しながら、さらさらと風に靡く後ろ髪を見つめる。
自分よりも少し低い身長をこうして見守るようにするのは、彼にとってはとても珍しいことだった。
隣を歩く恋人は幾夜よりは長身だったし、かといって彼にこうして休日にまで一緒に歩くほどの女の友達は存在しない。

幾夜の視線が、再びヒールの先に戻る。
先程よりも高くなったテンションのせいで、痛覚がなくなってしまっているのか。
しかし、アドレナリンが分泌している今は誤魔化せようと、昂ぶりが冷めてしまった後にはどうしようもない。

（後先考えずに、後で泣くタイプだな……。
飯食ったらタクシーにでも乗せて、さっさと帰らせないと。
普通に考えて、明日は仕事だろ？
支障をきたして貰っても困るし……）

そう決意して、ホテルに程近い可愛らしいカフェまで黙ってついていったのだ。

＊＊＊＊＊

「……」

普段の自分だったら、絶対こんな場所には足を踏み入れないだろう。
香澄が来たかった店は、そんな感想を幾夜に抱かせる、実に少女趣味の店だった。

可愛らしい内装に言葉が出ない。

確かに幾夜は女装をしているが、彼が好むのはどちらかと言えばシックなデザインだ。
今している格好だって、自分の好みを熟知しているゆかりが、彼の男としての性別をカバーしつつ、それでもラインが綺麗に出るように、と考え抜いて選んでくれたものだった。
……途中、いかにも可愛いものが好きそうな月華が店の中から持

ってくる洋服を、虎狼が苦笑しながら留めてくれてなければ、ゆかりは選んでしまっていたかもしれない、という微妙なトラブルは発生したが。
幾夜は月華の醸し出すほのぼのとした空気を思い出していた。
今の虎狼の柔らかさは、間違いなく彼女が与えている安心感から来ているものだろう。
何がそんなに彼に安息を齎しているのかは判然とはしないが、彼には彼の事情があるのだろう。

「いらっしゃいませ、何名様ですか？」

専門学生くらいの店の制服を着たウェイトレスが、明るい声で彼らを出迎えた。
外からの光を取り入れる構造になっている店内は、流行っているのだろう、人でごったがえしているように見受けられた。
普段、隠れ家的な、あまり人のいない場所を好む幾夜には少々不得手な空間だった。
――が、今回ばかりは仕方ない。
隣で香澄が嬉しそうにピースサインをしている。
平和を願っている訳でないのは分かっているが、せめて自分の心を早く平静にして欲しい。

（頼むから、早く案内してこいつを座らせてくれ）

そう思いながら、再び足元に目をやるのだった。

「只今案内しますので、少々お待ちください」

お決まりの文句を聞き流しながら、アンティーク調の店内をぐるりと見渡した。

そこにいる客は、皆一様に若い女性のグループがカップルばかり。

自分が場違いだと一瞬思ったが、現実的には若い男女の2人組み、他人にしてみれば女性グループに他ならない。

案内を待っている間、一点を凝視している香澄の視線の在り処に幾夜は気が付いた。

（何見てんだ？）

釣られたように目線を追うと、色とりどりの春の花のようなスイーツが並べられたショーケース。

甘いものがあまり得意でない幾夜には、砂糖の塊のようなものを食べる女性の神経はよく理解出来なかったが、例に漏れず香澄もそれが好きな人種らしい。

しばしの間、手持ち無沙汰な幾夜は、香澄の横顔を観察する。

ただぼーっとその顔に目を向けていた彼は、些細な変化に目を眇めた。

（ん？あんま嬉しいように感じられないのは、気のせいか？）

ぶつかった時や治療する時にしか、彼女の険しい顔は見ていない。
しかし、好きなものを眺めていたはずなのに、どうして眉間に皺を寄せるような、複雑そうな顔をしたのだろう。
ケースを見詰めていたのを幾夜が気に留めた瞬間に彼女が浮かべていたのは、確かに笑顔のはずだったのに。

「お待たせ致しました。
それではご案内致します」

その呼び掛けで、正気に戻ったように香澄は慌てて表情を笑みに変えた。
香澄の笑顔に、胸を撫で下ろすような安心感と、喉にささった魚の小さな骨のような、奇妙な違和感を感じる。

（……？
何で俺、こんなに気になるんだ？）

自分の感情の在り処さえ分からなくなり、彼は口元へ手を運んだ。

食べたいものを問われながら、意識はどういう訳か定まらない。
他の人間と意識的に比べたことはないが、決断力は鈍い方ではないと、幾夜自身は思っていた。
それなのに――、何故か目の前に座る彼女が気になって気になって、文字を追ってる内容が頭に入ってこない。

仕事の疲れが取れていないのかもしれない。
それともここ最近、精神的に休まらなかったせいなのだろうか。
内心自分の脆弱ぶりに苦笑しながら、意識をゆっくりでも文字を追うことに専念しようとした。

が。

やはりなにかが引っかかる。

それはいつの間にか指に入り込んでいた小さな棘の様な。
微かな違和感。
何かに集中してる内は忘れられるのだが、1度気に掛かってしまうと拭えない感覚だ。
しかし、何がそんなに幾夜の注意を散漫にするほど引っかかるのか。
その理由の検討さえもつかないことが、割に理論的な彼の気をそぞろにする。

「きーまった♪」

前に擡げた頭部の上から明るい声がした。
釣られたように視線を彼女にやると、香澄は決めたメニューの上に指を置いて微笑んでいる。
幾夜はその指の下に記載されたメニューに目を落とす。
そして指差された料理の内容を確認してから、今日の為に丁寧に整えた2本の柳眉の真ん中に薄い皺を刻んだ。

「……じゃあ、このパスタとサラダセットで」

彼女を前にしてこの短時間では食べたいものを選ぶことは出来なかった。

何故だろう。

実際に彼女を前にすると、考えが纏まらない。

メニューを決めること位別段考えるとこでもないのだが、引っかかる何かに意識が散文的になり答えを導き出せない。

そんな幾夜の心の中など露ほども知らない女性は、彼の言葉に頷いた。

「はい、了解です。

じゃあ、オーダーしますね」

彼女の弾んだ声を聞きながら、失念していたことに気がつく。

――そう言えば。

何故彼女はあの店の前に突っ立っていたのだろう？

あの店に用事があったのではないだろうか？

今自分の前の席に座っている彼女は確かに社会人に見える。

しかし、着ている物や所作から、特別お金のあるような令嬢とは思えない。

では、何故1人であんな場所に立っていたのか？

俺を食事に誘った時、彼女は何て言ったっけ？
散り散りになった思考回路が、一箇所にまとまりかけた時。
「お待たせ致しました」
ウェイトレスの鼻にかかった甲高い声が、再び幾夜の頭の中を乱雑にする。
はまりかけたジグソーパズルを横からぐちゃぐちゃにされたような、幾夜は髪を掻き毟りたいような感覚を、ぐっと堪え唇を引き締めた。
香澄が2人の注文の品を伝えると、店員は幾夜の選んだセットにデザートが付くと教えてくれた。
（デザート……）
そう、最初のこの思考の混乱はそこから始まっている。
気持ちを押し込める。
雲を掴めないような、そんな歯痒さを感じさせない素振りを心掛けながら。
幾夜は目線を固定させた。
「……生クリームは食べられる？」

「はい、大好きですけど？」

――知ってる。

ぱちくりと瞬かす瞳を直視出来ないまま、幾夜はオススメケーキの中から1つを指差した。

「それじゃあ、このオススメショートケーキで」

メニューを店員に手渡しながら、彼女の返答に即座に胸に去来した答えを再度頭の中で反芻する。

（――知ってる？）

それはほんの数分前に、彼女がドルチェ類を凝視したことを知っているからではない、もっと遠くからの既視感。

遠い記憶から……？

「お姉さん、お名前を聞いてもいいですか？」

突然の問いに幾夜は面食らった。
名前？
女装するようになってから数年経つが、知り合いになった人間に自分の性別を偽って『教える』のは初めての経験だ。
自分の隣を男性として歩くのはいつも恋人だったし、ゆかりの店を訪れるのはいつも普段のスタイルのまま。
虎狼と出逢った場所だって最初から『そういう趣味』の場所だった。

「……ゆかりです」
「ゆかり、さん！」

咄嗟に声に乗せた名前は、先日あったゆかりの名前。
思い浮かんだのが月華でなくて良かった。
音として自分の耳に入ってから、確認した彼女の復唱を聞いてから、

「あ、私は香澄です！」
「……香澄さん。
綺麗な名前ね」

数秒遅れの安堵が口元に浮かぶ。
それから。

……『香澄』『香澄』。

脳内ではカスミという音を勝手に漢字変換し固定した。

不器用でどこか損な性格だ。

そう友人には言われる。

真面目な癖に要領が悪いのだと、自分でも自覚がある。

ひとつ気になるとつい突き詰めて考えこんでしまうのが、彼の思考の特徴だった。

今回ももやもやとした霞がかった記憶の片鱗を、雲をも掴む気持ちで脳の一部が探りはじめた。

（……すぐに分かりそうもないのに、また考え疲れしそうだ）

竜崎幾夜として生を受け、自分の肉体として付き合い始めて早24年。

「自分の思考」に対して多少の見識はある。

理解して知っていた処で変えられはしない、ということも既に悟っていた。

（こんな色んなことが山積みな時に、気になることが降ってこなくてもいいのに）

もう「考えないこと」を諦めよう。

目の前に運ばれた料理のいい匂いと温かな湯気が幾夜の食欲を刺激し出す。

女性好みのメニューとは言え、彼の目にも少々ボリュームは足りないながらも実に美味しそうだ。

そして自分が朝から殆ど食べていないことを思い返す。

幾夜も幾夜なりに緊張していたのだ。

途中ドリンクに大量に砂糖を投入する香澄の所業に、目を点にするような呆気に取られながらも。

幾夜はそれから何気なく、ちょっと変わった一日を終わらせるはずだったのだ。

彼が彼女に気を利かせてデザートを薦めたりしなければ。

これから起こりうることは、「今この時」は免れていたのかもしれない。

これから起こる不測の事態など、幾夜は知るはずもないまま、ご機嫌な香澄の笑顔を眺めていたのだった。

＊

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0734m/

キスはレモンの味？

2011年5月5日14時23分発行